

マルクス世界市場論

——マルクス「後半の体系」の研究——

村岡俊三

現代経済学叢書

30

新評論版

著者紹介

むら おか しゅんぞう
村岡俊三

1931(昭和6)年 大阪市で生まれる
1953(昭和28)年 九州大学経済学部卒業
1958(昭和33)年 九州大学大学院経済学研究科博士課程修了
以後、九州大学助手、西南学院大学助教授、
東北大学助教授を経て
現在 東北大学経済学部教授(担当、国際経済論)
住 所 仙台市三条町14-1-52

マルクス世界市場論

<検印省略>

1976年12月15日 初版第1刷発行
1979年4月15日 初版第2刷発行

2500円

著者 村岡俊三

発行者 二瓶一郎

発行所 株式会社 新評論

〒160 東京都新宿区西早稲田3-16-28 電話東京(202) 7391番
振替 東京6-113487番

落丁・乱丁本はお取替えします

印刷 新栄堂
製本 黒田製本所

© 村岡俊三 1976年

Printed in Japan
3333-331030-3177

まえがき

「世界市場——これは、総じて資本制的生産様式の基礎および生活圏をなす」、とは『資本論』第三部第六章にあるマルクスの文章であるが、この内容はどのように理解されるのであろうか。これが、年来、私の脳裏を離れぬ問題であった。

従来、この世界市場の理論的諸問題はいわゆる国際経済論なり世界経済論でとり扱われてきた。そして、国際価値、外国貿易、資本輸出入、国際通貨、さらには後進国開発、等々の分野についてかなりの量の研究が積み重ねられてきたことは、周知の通りである。だが、私のみるところでは、従来の諸研究は次の二点で不充分であった。一つは、それらは概して個々の分野に視野が限定されていて、他との関連が必ずしも明確にされていないことであり、いま一つは、その研究方法自体が、右に例示した分野を、世界市場という具体的な市場を前提した諸資本の運動に即して論ずる、というものではなかったことである。こうしたことのために、従来の諸研究は、冒頭で引用したマルクスの文章の内容を明らかにするには程遠かった、といえるのである。

私が本書で試みたことは、従来の諸研究の成果を批判的に摂取しつつ、『資本論』で与えられている資本制的生産の諸範疇・諸法則が世界市場という具体的な市場ではどのような形態をとって自己を貫徹するか、を明らかにするとともに、それとの関連で、種々の国際経済範疇を正しく位置づけることであった。而して、そのさい、私は、この課題を、マルクス「経済学批判体系プラン」のいわゆる「後半の体系」の抽象レベルにおいて、かつ『資本

論』に散見されるこの方面に關する諸断片を手懸りとして、果たそうと試みた。その意味では、本書は、私の理解する「後半の体系」であつて、副題として「マルクス『後半の体系』の研究」とした所以である。それはともかく、こうした方法をとつた理由は、右にも示唆したところであるが、『資本論』で指定された諸範疇・諸法則は普遍的なものであり、したがってそれらは、複数の国民經濟から成り立つ世界市場においても、一定の形態變化を伴うとはいへ妥当する、と考えたからである。

本書は、新たに執筆した序章を別とすれば、私がこれまで發表してきた論文のうち、本書のテーマに關連するものを選び、若干の補筆を行なつたうえで一書にまとめたものである。全体は二部に分かれる。先ず、第一部（第一章、第二章）は、右に述べたような考え方にもとづいて、世界市場という具体的な市場における諸資本の運動態樣を考察し、それを複数の国民的利潤率の形成において總括した第一章と、この第一章で指定された各国諸資本がどのような信用關係をとり結ぶかを論じた第二章から成る。この第一部では同時に、先に例示した種々の國際經濟範疇がそれぞれ然るべき位置を与えられている。何れも、私が勤務する東北大学の研究年報『經濟學』の最近号に掲載された論文を再録したものであつて、この第一部が本書のいわば本論をなしている。第二部はこうした第一部の論述のなかの個々のテーマを掘り上げた研究であつて、第一部では簡単に済まされている個々の重要なテーマについて詳細な検討が行なわれている。論文の發表順からいえば、第二部第三章の國際価値を論じた論文が最も早く、以下、順に第一〇章まで行き、そして第一部の第一章、第二章へと続くのであつて（各章の末尾に、その論文の發表年月日を記しておいた、その点で、第一部は第二部の個々のテーマをすべて網羅し、この種の問題に關する私の最新の考え方を示すものとなっているが、論旨の細部を理解して頂くために、第二部の諸論文を併せ参照して頂きたいと思つている。

本書の意圖と構成は以上の通りであるが、これまでの研究をこのような形でとりまとめてみて、私は、改めて、

問題の広さと深さ、私になしえたことの貧しさを痛感している。本書に対する忌憚のない御批判を得て、今後の研究の糧としたいと念願している。

拙い研究成果ではあるが、それをこうした形で世に問うことができるようになるまでには、私は多くの方々から種々の有益な指導と助言を頂いた。とりわけ、九州大学名誉教授 岡橋保、元九州大学産業労働研究所教授 故吉村正晴、東北大学経済学部教授 原田三郎の三先生の学恩は筆紙につくし難い。この機会に心からなる御礼を申し上げたい。また、岡橋先生を囲む同門の先輩、友人は、学生時代からこんにちまで、公私にわたり常に私の研究を見守り、激励して下さった。さらに、私が現在勤務する東北大学経済学部の重厚な学問的雰囲気と、私が以前に勤務した西南学院大学商学部の活気に満ちた学問的環境にも、私は多くのものを負っている。関係各位にも併せて深甚なる謝意を表したい。なお、本書の校正には東北大学大学院の浜田康行君のお世話になった。

新評論の二瓶一郎氏から本書の出版をすすめられたのは数年前のことである。本書は、それ以来こんにちまでの、同氏の暖い配慮と激励の賜物である。同氏と、出版にさいし種々お世話になった新評論の梅村よし子氏に対し、厚く御礼申し上げる。

昭和五一年一〇月

村岡俊三

目次

まえがき

序章

第一部

第一章 世界市場における産業資本の編成と運動

はしがき

第一節 世界市場の抽象的構造

第二節 世界市場における諸資本の運動(一)

第三節 世界市場における諸資本の運動(二)

第二章 世界市場における信用関係の展開

はしがき

第一節 世界市場における貨幣流通の抽象的構造

第二節 世界市場における商業信用の諸問題

第三節 世界市場における銀行信用の諸問題

第四節 世界市場における貨幣市場と中央銀行

九

一七

二七

一八

二六

四

二六

二六

二六

二六

二六

二六

第二部

第三章 世界市場における価値法則——国際価値論研究(一)——

はしがき……………一〇五

第一節 社会的必要労働時間について……………一〇八

第二節 世界市場の構造的特性……………一一三

第三節 世界市場における熟練と強度……………一二六

第四節 世界市場における標準的生産諸条件……………一二九

第四章 国際間における貨幣の相対的価値の相違について——国際価値論研究(二)——

はしがき……………一三九

第一節 問題の所在……………一四〇

第二節 「貨幣の相対的価値の相違」とは何か……………一四三

第三節 「修正」命題と金……………一四四

第四節 国際間における貨幣の相対的価値の相違……………一四四

第五章 世界市場における競争の二法則——国際価値論研究(三)——

はしがき……………一四九

第一節 国際価値論の輪郭……………一五〇

第二節 世界市場における同種部門内の競争……………一五三

△補論(一)……………一六〇

第三節 世界市場における異種部門間の競争……………一六七

△補論(二)……………一六九

第六章	資本輸出論序説	一六
はしがき		一六
第一節	資本輸出に関するマルクスの所説	一七
第二節	資本輸出の一般的条件(誘因)	一八
第三節	資本輸出の特殊的条件(誘因)	一八
第四節	对外投资と利潤率均等化法則	一九
第五節	結びにかえて	一九
第七章	世界貨幣と外国為替	一九
はしがき		一九
第一節	「世界貨幣」の位置と構成	一九
第二節	「世界貨幣」の解説	二〇
第三節	「世界貨幣」の方法論	二〇
第四節	外国為替の基本的規定	二二
第八章	外国為替取引について——国際金融論研究(一)——	二六
はしがき		二六
第一節	外国為替論の理論的位置	二九
第二節	外国為替論の方法	三〇
第三節	外国為替取引の必然性	三一
第四節	外国為替相場の本質	三六
第五節	外国為替取引と銀行	三六
	——結びにかえて——	四二

第九章 「國際通貨」問題とは何か——國際金融論研究(二)——	二四〇
はしがき	二四〇
第一節 問題の所在	二四一
第二節 外國為替の原理	二四三
第三節 外國為替と銀行信用	二四五
第四節 現代における「貴金屬と為替相場」	二五七
第五節 結びにかえて	二五九
第一〇章 マルクス信用論の骨格	二六〇
はしがき	二六〇
第一節 商業信用と再生産	二六三
第二節 銀行信用の諸問題	二六五
第三節 中央銀行と市中銀行への銀行業の分化	二六六

序 章

本論に入るに先だち、本書のテーマとその意義について一言しておこう。

周知の通り、資本制的生産様式は、その成立以来こんにちに至るまで、国民経済という枠組をもち、かつそれらの展開する複雑な相互依存関係を通して発展してきた。われわれの眼前にする資本制的生産もまたこの例外ではないのであって、われわれ経済学を学ぶ者にとっての究極的な課題がこうした現実の資本制的生産の分析であることは、いうまでもないところである。

ところで、こうした現実の資本制的生産の分析はいかにして可能となるのであろうか。マルクス経済学の立場にたつ限り、この現実とは、『資本論』や『帝国主義論』などの古典で解明された資本制的生産の内的関連（それぞれの抽象レベルは異なるが）を踏まえて、現に生起している諸事実を具体的に分析することによって解明される、という答えが返ってくるに相違ない。これは一般論としてはその通りである。だが、立入って考えてみると、『資本論』にせよ『帝国主義論』にせよ、それらは何れもその理論の性格にもとづく一定の限界をもっているものであって、したがってそれらで示された資本制的生産の内的関連のみでは現実がすべて説明されることにはならないことに、注意しなければならない。

周知の通り、『資本論』は、「資本制的生産様式の内的構造のみを、いわばその観念的平均において敘述する」⁽¹⁾ことを課題としたものである。ここでは、諸資本の「競争の現実的態容」のごときものはすべて捨象され、資本一般の論理が純粹にとり出されるのである。また、このことと関連して、『資本論』では、国民経済とか国境とかの、

マルクスが眼前にした資本制的生産の現実的枠組も捨象され、いわば市場一般というべきものを前提して論理が展開されているのである。「研究の対象をその純粋性において、その攪乱的な付随的諸事情から自由に捉えるためには、われわれはここでは、全商業世界を一国と看なし、また資本制的生産が到るところで確立して凡ゆる産業部門を征服したものと前提せねばならぬ」という文言が、これを物語っている。総じて、こうした対象の限定と抽象レベルの設定が資本制的生産の内的関連を純粹にとり出すために必要不可欠の手続きであったことは、改めて喋々するまでもない。『資本論』が資本制的生産の一般理論ないし原理論と呼ばれる所以は、実は『資本論』のもつこうした自己限定に求められるのであるが、まさにそれゆえに、『資本論』の叙述だけで現実がすべて説明されることにはならない、としなければならぬのである。

(1) 『資本論』長谷部文雄訳、青木書店版、(四)の一、一七一ページ。

(2) 『資本論』(一)の九〇五〜六ページ。

『資本論』の性格をこのように確認したうえで、しかし、われわれは同時に、次の点をも確認しなければならぬであろう。それは、マルクスはこのような『資本論』の中で、彼自身が設けた「全商業世界を一国と看なし」という前提から離れて、国民経済ないし国境という枠組を考慮せずには済まない具体的な叙述を随所で行なっている、という点である。例えば、第一部第三章第三節C「世界貨幣」はその代表的な部分であるが、この外にも同第六篇第二〇章「労賃の国民的相違」、同第七篇第二五章「近代植民論」、さらには第三部第五篇第三五章「貴金属と為替相場」などがあげられる。これらのまとまった章、節の外に、マルクスは国民的剰余価値率、国民的利潤率、国民的利率などの諸範疇を遺しているが、これらは総じて、彼が国民経済の枠組を前提するより具体的な資本制的生産の内的関連について並々ならぬ関心をもっていたことを物語るもの、といえるであろう。然り。マルクスは夙に、彼の経済学批判体系として、国民経済の枠組をもつ・抽象的な市場一般と比較すればより具体的な市場たる世

界市場を前提する・資本制的生産の内的関連の解明を志していたのである。一八五〇年代末に執筆された彼のいくつかの「プラン」のヴァリアントは、このことを示している。以下はその代表的一例である。

「篇別は明らかに次のようにされるべきである。(一)一般的・抽象的諸規定、したがってそれらは多かれ少なかれすべての社会諸形態に通じるが、それも右に説明した意味である。(二)ブルジョア社会の内部的仕組をなし、また基本的諸階級が存立する基礎となっている諸範疇。資本、賃労働、土地所有。それら相互の關係。都市と農村。三大社会階級。これら諸階級間の交換。流通。(私的)信用制度。(三)ブルジョア社会の国家の形態での総括。それ自体との關係で考察すること。「不生産的」諸階級。租税。国債。公信用。人口。植民地。移住。四生産の國際的關係。國際的分業。國際的交換。輸出。為替相場。(四)世界市場と恐慌。」(3)

これを見れば、マルクスの究極的な関心が奈辺にあったかが分かる。そして、私が先にあげた「世界貨幣」等々の章や節、国民的剰余価値率などの諸範疇は、「プラン」に即していえば、四、五項目から成ると考えられるいわゆる「後半の体系」に安住の場を見出すものである、とみることができるのである。

(3) 『経済学批判』国民文庫版、三〇六―七ページ。

マルクスの「プラン」についてはこんにち多くの研究が積み重ねられていて、その帰趨についてここで軽々に論定することは避けた。しかし私は、『資本論』の基本的性格を既述のような抽象レベルの著作であるとおさえ、したがってそれは「プラン」の一―三項を基本的にはカバーするものであるとおさえたと、なおマルクスが『資本論』の各篇、章(それも第一部の)の末尾に右のような具体的な叙述を配し、かつ断片的とはいえ「国民的剰余価値率」等々の諸範疇を遺していることからみて、彼が『資本論』執筆の時点においても「プラン」の「後半の体系」についての関心を失っていなかった蓋然性、したがってこれらの章句を手懸りとして「後半の体系」を構想し、つまり国民経済・国境という枠組をもつ資本制的生産の内的関連を探究し、それを現実分析の用具に鍛えあげるこ

とはマルクスの真意からさほど距たるものではない蓋然性、は極めて大きいと考える。⁽⁵⁾ 本書は、こうした問題意識に支えられて私がこれまで行なってきた「後半の体系」に関する研究成果を、中間報告の形で一書にとりまとめたものである。

(4) 「プラン」を論じた文献は極めて多いが、ここでは、「後半の体系」にとくに触れたものとして、高木幸二郎『恐慌論体系序説』（大月書店、昭和三十一年）、および原田三郎編『資本主義と国家』（ミネルヴァ書房、昭和五〇年）をあけておく。

(5) 念のために一言すれば、本文でいう「後半の体系」を国際経済論に倣小化してはならない。私の理解する「後半の体系」は、国際経済関係によって結びあわされた諸国民経済の総体Ⅱ世界市場を対象とし、そこでの資本の論理を見るものである。別言すれば、それは、「プラン」の一／三項の「前半の体系」を基本的にはカバーしていると考えられる現行『資本論』が抽象的な市場一般を前提して資本制的生産の内的関連を問題としたのに対し、この前提をとりはずし、国境のある・世界市場というより具体的な市場を前提した資本制的生産の内的関連を明らかにするものであって、決して「前半」Ⅱ国民経済論、「後半」Ⅱ国際経済論というようなものではないのである。

さて、私は、以上のように、国民経済・国境の枠組（それをどのように把握するかは本文で示される）をもつ資本制的生産の内的関連を説明する「後半の体系」が考えられる、とするのであるが、とすると、ここで、かかる「後半の体系」とレーニンの『帝国主義論』との関係はいかに理解されるのか、という問題が生ずる。これについては今後の研究に俟つところが少なくないのであるが、私は、当面、次のように、すなわち、『帝国主義論』は上述のような「後半の体系」を事実上前提し、そこで示されるより具体的な資本制的生産の内的関連が独占の成立によってどのような変容を余儀なくされるか、ということの基本線を、二〇世紀初頭の具体的な諸事実に即して理論化したものではないか、と考えている。⁽⁶⁾ 別言すれば、私は、『帝国主義論』は独占段階における、国境という枠組をもつ資本制的生産の内的関連の基本線を描破した書であると考えている、ということである。なお、右で「基本線」を

という限定を付した所以は、「後半の体系」のカバーする範囲は当然のことながら『帝國主義論』のそれよりも遙かに広く（例えば「プラン」の最終項目が「世界市場と恐慌」であることを想起せよ）、『帝國主義論』はその基本的な部分を独占資本の本質に即して理論化したにとどまる、ということに外ならない。最初に、『帝國主義論』にもその理論の性格にもとづく一定の限界があるとしたが、それはこのことと関係しているのである。

（6）『資本論』と『帝國主義論』との関連を問題にし、両者の間には「後半の体系」が介在する、という考え方を早くから示したのは原田三郎氏であった。原田三郎・庄司哲太『帝國主義論コメンタール』（ミネルヴァ書房、昭和四八年）を参照。

以上によって、本書で問題とする「後半の体系」の性格と位置はほぼ明らかになったであろう。それは、要約すれば、『資本論』の論理を国境という枠組をもつ抽象レベルで具体化したものであるとともに、『帝國主義論』のバック・グラウンドをなすより具体的な資本制的生産の内的関連を説明するところのものである、ということができるであろう。

